

1-11				
主題	老人福祉施設を地域包括ケアの社会資源として利用するための条件と実証			
副題	新たな職種が地域連携に及ぼしたこと			
キーワード 1	地域包括ケア	キーワード 2	地域との連携	研究(実践)期間 10ヵ月

法人名・事業所名	社福)三幸福社会 社の癒しハウス文京関口			
発表者(職種)	柳沼 亮一(施設長)、加藤 祐太郎(地域包括システム担当兼介護職員)			
共同研究(実践)者	なし			

電話	03-5227-8835	FAX	03-5227-8836
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	豊島区と新宿区に隣接する文京区に所在し、施設には、昔ながらの商店街が隣接しています。3大介護の他にプラス「笑い」を含めた4大介護をコンセプトとし、「入所する」という感覚ではなく「引っ越す」という感覚で生活ができるようにもしています。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成25年のオープン当初より、地域に密着した施設運営を目標とし運営。地域との連携を進めてきた。

オレンジカフェを実施する際に多くの問題が抽出された。地域包括システムの構築において開催を推奨されている。各地域や団体などで多くの取り組みが行われその数も増えている。インターネットなどでも告知され、安易に検索をすることができるが、実際は日程の変更や開催自体がなくなっていたりすることも多い。また、施設で行う際地域の参加者が少なくなってしまうたり、担当者の業務負担増加などがあり、開催自体が困難であることが多い。くつかの問題で一番大きかった担当する職員の業務負担である。また、予算や広報などの問題も上がった。平成27年カフェをスタートするも、やはり業務負担が増え定期開催が出来ず断念する。オレンジカフェの内容の検討や広報・地域民生委員や自治会との連携も他の業務が入ってしまい日程がうまく合わない事が原因となる。社会福祉法人の施設内部の調整を取りながら地域連携を進めるには、介護支援専門員・相談員と別に地域との連携を進める職種の必要性を感じる。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

施設自体が、地域包括システム社会資源の一つとして活動を行う事で地域介護での介護の啓発や公益な取り組みが多く出来るのではないかと考えた。また、介護支援専門員や相談員以外の職員を地域包括システム担当(介護福祉士として5年現場の経験者)を配置。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 自治会への協力要請を行う。結果として自治会長がオレンジカフェの代表となり、自治会の主催とした。
- ② 文京区社会福祉協議会に協要請を行い地域の民生委員などにも声かけを行なった。③地域がオレンジカフェの主催団体となりそのための組織編成を行なった。その結果補助金の申請が可能となった。
- ③ 象 者；地域の方、当施設のご入居者の方々、認知症の方、そのご家族、介護に携わる方や

学生等

- ④ 実施内容：回毎にテーマを持った集団レクを実施し、「歌声喫茶」や「脳トレ体操」などメインの企画を実施後、残り時間は脳トレグッズを配布し過ごしていただく。また、実施後参加者様にアンケート配布し感想や個々のニーズについて伺っている。
- ⑤ 実施日、実施時間：毎月第2土曜日、14時～16時の2時間④カフェをご利用される方は一人100円（ご入居者様も含む）、店長の気まぐれお菓子やいくつかの飲み物が記載しているメニュー表をご用意（施設にあるコーヒーマーカーにて対応）
- ⑥ 連携は文京区社会福祉協議会、サロンの開設助成金や会場費、運営費は文京区社会福祉協議会にある「ふれあいいきいきサロン」に登録することで助成金支給されている。（助成金以外でかかる費用については施設負担）
- ⑦ 地域包括ケアシステム担当を配置

《4. 取り組みの結果》

回を重ねる毎に良い点も増えつつ、改善点もアンケート通じて知ることができ、いい方向へと進んでいる。月1回、同施設内のスペースを借りて、地域の方が主体のカラオケ交流会に参加されている方や近くの福祉センターで週2回体操取り組みされているサロンの方が参加して下さる。その集まりにて口コミで広げてくださったおかげもあり少しずつ参加者の方も増えてきた。また、ご入居者様も外部の方と接することで普段と違った生活もでき、逆に地域の方も賑やかで大人数の方が楽しいとお声も頂戴する。それを例に歌声喫茶後にご入居者様の自作の脳トレグッズを参加者の皆様としたところ、とても気に入ってくださりカフェ以外でも参加者以外の方と実施してみても楽しんでいただくと報告を受ける。また、参加者の方から持ち込み企画で脳トレパズルを持参して下さり、カフェで実施したところ参加していたご入居者様が気に入られ、カフェ以外の日でもそのパズルを楽しまれていたとご報告受けた。

《5. 考察、まとめ》

今回の取り組みにあたって、法人内のカフェ拡大への大きい壁とぶつかり、一時はカフェの取り組みを断念してしまうところまで来たが、当施設の日頃の地域との関わりと何より自治会長の方の寛大なお心により無事に突破することができた。ならびに、今回の取り組みは長年培ってきた地域との連携や参加して下さった方による口コミがとても重要であることも実施していく中でとても実感した。また、社協の方のご協力もあり、カラオケ交流会と体操から各一名ずつ民生委員の方が共にカフェに参加して下さったことで、地域交流の取り組みに慣れている方から貴重なご意見を沢山頂戴していることも大きかった。

また、地域包括システム担当という職種を配置する事に関しても有効性が高い事が確認できた。地域との連携やそれ以外の公益な取り組みが実現している。地域包括システムの構築が叫ばれる中、福祉施設が地域包括システムの社会資源になる事で介護事業に対する啓発や介護で悩む人々の駆け込み場所ともなりうる事が確認できた。介護の事で悩んでいる方の相談も受けることができている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

魅力あふれる認知症カフェの始め方・続け方 / 浅岡雅子 [本]

《8. 提案と発信》

自治会長様からも地域の方々で一人暮らしが増える中、外出する目的がなく引きこもりがちな方が増えてきていると声聞かれていた。施設が地域としっかりと手を組み法人も地域運営に真剣に取り組むことで、地域も施設の取り組みに力を貸してくれる。地域包括システム担当のような職種を配置しその為だけに、多くの取り組みをしていくことが、地域や行政などの持つ隠れた力を引き出すことができると感じた。

